

第3回

新宿区次世代育成協議会・部会

平成22年11月15日(月)

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

1 開会

事務局

開会挨拶

資料確認

2 平成22年度新宿区次世代育成協議会部会のまとめについて

福富部会長

それでは、議事に入りたいと思います。

今日この部会で審議をいただきまして、しばらく時間があいて、来年3月に全体の協議会があって、そこでこの部会としてのまとめを報告する。部会としては今日が最後という形になります。

それで、これまで何度か会議の中で、皆さんから貴重な御意見をいただきました。前回の協議会では、それを中心に審議しました。そして協議会でもいろいろと御意見をいただきました。そのことを、大きな資料1に一覧表という形で、まとめてございます。

その際に検討というか工夫いたしましたのは、現状に対する何らかの対応、それから、今度は将来に向けての健全な青少年の育成という形での予防策で、縦に2つの柱を設定しました。そして、内容的に、これまでの御議論を整理し、5つの課題というかテーマとしてまとめました。

1つは普及啓発の充実・強化、これは、いろいろと御意見が出たところでございます。それから、相談体制を充実あるいは強化するという形ですね。そして、早期発見・早期対応が大事だという御意見もありました。それから、ただ関係機関で、個々が充実するのではなくて、その連絡等々も含めて関係機関連携、これが大事だと。一つひとつバラバラというよりも、有機的に関連し合うということが大事なのではないかという御意見もいただきました。そして、最後には、地域で何ができるんだろうかという形の御意見もありました。このような形で、これが適切かどうかは、いろいろ御意見もあろうかと思うんですが、このような図式を作成したと。

そして、縦のところ、横のところもそうですけれども、完全におさまり切れないということは当然出てくるわけでして、それは、この図の中で現状への対応と予防策というものにまたがってチャートが出ているという、これはもう、それぞれ、どちらかに属し切れないで、

両方ということになる。啓発の充実というものと体制の充実・強化というもの、これもどちらかに属し切れない。それはまたがっております。

さらに、みんなにまたがっているものもあろうかという形で、整理をしてみたわけでございます。ぱっと見て概念として頭に入るとするのは非常に難しい問題であろうかと思えますけれども、このまとめについて皆さんのほうから、少し御意見をいただければと思いますが、何でも構いません。どなたからでも。

じゃ、上のほうから順次やっていきましようか。

一番多かった御意見の一つですけれども、普及・啓発というものが、非常に広報が足りないのではないかという御意見等々ありました。それは、現状に対する問題もあります。それから、予防という意味でもこの問題はとても大事だという形で、整理させていただきました。我々、実際に伺ったサポートステーション、場所がわかりづらいという御意見もいただきました。そんなところがここに出ております。若者の現状を、もっと危機感を持って我々は認識する必要があるのだという御意見もありました。また、地域のいろいろな活動がその地域だけであって、どこまで認知されているのかなど、このあたりはどうでしょうか。

委員

私は、前回の協議会の中で、普及啓発は大事なことなのかなと申し上げていたので、全くそれはそれで結構なことだと思います。けれども、「しんじゅく若者サポートステーション」の取り組みはすばらしいが、場所がわかりにくいということがありました。それは、テナント料が物すごく高いということも理由の一つではないでしょうか。事務所がわかりにくいところにしか置けないのかなというふうな心配が、つまり、これだけのお金を潤沢に使っていいですよというわけじゃないんで、入り口が狭かったり、この辺はちょっとどうしようもないかなという感じがするところではあるんです。今後、何か区のほうからも、支援があれば、ありがたいなということがあります。

福富部会長

この御意見で多かったというか、ポイントは、区内にある幾つかの民間のものも含めて、いろいろな形で若者に対する支援活動は行われているけれども、それについて区民に周知徹底するということが、まだ甘いのではないだろうか。これからも、より強固な周知方法があり得るのではないか、その工夫をすべきだということは、いいんじゃないかと思うんですが、どうでしょうか。

委員

この場所ですけれども、場所については、今のままでいいかと思っているんです。ただ、その周知ということは、関係者にだけではなくて、関係以外の方にも周知するということがすね。そこに行っている人たちは、周りからは見られたくないという関係もありますので、だから本人が、その場所を特定できれば、本人は間違いなく行けると思うんですよね。行けることを、ちゃんと本人たちに知らせあげれば、場所はどこでもいいかなと思っています。

委員

場所がわかりづらいということについて、何か工夫が必要ではないかというのが私の意見の趣旨なので。

福富部会長

ただ、場所は、いろいろ制約があるかと思いますが、周知徹底するということは、何を周知徹底するのかという問題があるかと思うんです。ただ、相談というか支援活動がなされていますよと、広報で載っけるだけでいいとは思わないんですね。おっしゃったようにサポートを受けること自身が、決して恥ずかしいことではない。それは今の時代、サポートを受けるということ自身が、負い目を感じることはないんだという風土づくり、これも広報して支援する必要があるんだろうと思うんです。誰でも受けることができるし、別に受けたからといって恥ずかしいことでも、負い目を感じることもないんだということは、ただ知らせるだけじゃなくて、それを、どう地域の中に精神的な風土として作っていくのかということも、この広報に実は入るんだろうと思うんです。そういうことも含めて、広報というのはとても大事ななという気はするんですけれども、いかがでしょうか。ただ活動をやっているということだけを、アナウンスするのではなくて。

委員

私は、この前、若者サポートステーションを見学させていただいて、すごく勉強になりました。体験者の方に語っていただいたことも、イメージがすごく作りやすくて、こういう場というのが本当に大切なんだというのがよくわかった。

ただ、逆に言えば、ああいった体験は、なかなか経験しなければ、広報でも紙だけだとすっと流れていってしまうので、生の声というか体験者の声をもっと知ってもらう機会がすごく重要ななということで、そういうことも含めて、この普及啓発がすごく重要ななという気がしています。

福富部会長

次の相談体制等の充実・強化、これも先ほどにかかわっていくわけですが、ここもそうですね。場所づくりというか居場所を作っていくということなんですけれども、何か。

委員

根本的なことを確認したいんですけれども、ここで今もお話をしている若者とは、基本的には引きこもりがち、もしくは引きこもっている若者が対象ということでのお話でよろしいのでしょうか。それとも広く、そうじゃない元気な若者も含めてのお話なのか、それをどの辺に絞ったら。

福富部会長

具体的に言うと、今若者支援に対する法的なものというのは、引きこもりとかに対して行政が何らかの対応をするということがあるんですけれども、ただ、実際に今引きもっている若者だけにターゲットを向けて、その子を何とかするという事は狭いと思うんですね。そういう子どもをつくらないようにするという事も、また一面で有効的な措置として大事なのではないかと。

委員

じゃ、その予防の中でも、一時的なものから、本当に完全引きこもりじゃないけれども、時々というような方までかなり広く入れていくんですね。

福富部会長

いや、これは、むしろこの場で定めていけば、いい話だと思うんですけれども。

委員

であるならば、その方の状況によって、広報一つとっても、場所づくりにしても、その方の深刻さの状況に応じて全然変わってくると思うんです。

そこをマトリックスじゃないですけども、整理して、それぞれに具体的に、こういう場合はこうしたほうがいいですねと言わないと、何となくということで終わってしまうという印象を持っているんです。

場所にしても、さっきのお話にあったように、まだ自分で対処ができるレベルの人であれば、本当にわかりやすく路面でやっているという場所がいいのかもしれないでしょう。今の若い世代が自発的に興味を持つような場づくりをして、そこから入っていくようにするのもあるでしょう。ただ、かなり引きこもり状態に近いような方の場合であれば、出てこれないとも思います。私が子育て支援に携わっている上で、ちょうど深刻な家庭とそうじゃな

い家庭との間を預かっているのです、出てきにくい、来られないような方に対しての周知のやり方は、全然アプローチが違ってくるので、その辺で整理しないで、何となくというのでいいんだろうかというのが正直な印象なんです。

福富部会長

いや、実は今日の後段で、今みたいな問題を実は皆さんに相談したかったことの一つなんです。というのは、形としていろいろなものができました。それについては広報もします。いろいろな予防策も形としてはこういうのがありました。形は整うし、目に見えるような状況で、いろいろな施策もやれる。だけれども、その裏に、それでいいんだろうかという問題があるように思うんです。そここのところを、この施策で、あるいはそれを議論しておくことが大事なのかと。

それは具体的にどうしたらいいのかと言うと、イメージはないんですけれども、まさにそうだと思うんですね。形ではない、現にあそこのサポートステーションに若者が行ったということは、大変な進歩なんですよ。でも、そこに行けないような人たちを、どうしたらいいのかということの問題と、違う問題があると思うんですね。引きこもりと言っても、10人いれば10通りの背景を持っているし、一律的にこうだという名案はないように思うんですけれども、ただ、この場で議論すべきことは、通り一遍というか、そう言っちゃいけないけれども、形を整えるだけではなくて、もう少し何か考えるべきことが、特に地域であるように思うんですね。

委員

部会長が言われたように、啓蒙・啓発というのは、不登校生徒が中学生で300何人に1人とか、そういうことについては知らない人もいっぱいいて、そこまで来ているということ、皆で知り合い、他人のことではなくて自分のこととする、風土づくりというのはとてもいいことだと思います。

しんじゅく若者サポートステーションがあるというお知らせ、それからサポートステーションで、よい経験をして自信を持ち自立した人もこういうふうにありますよという報告とか、それも大事だと思うんですけれども、でもさっき言われたように電話しても、話をして、恥ずかしくなく、そこへ行ってフランクに話して、そこに居場所があるような状態ができるような啓発でないといけないと思いますけれども。

ちょっと、何を言っているのかよくわかりませんが、そんな感じ。

福富部会長

いや、イメージしていることは伝わり、大分近い。

例えば、この文の中で若者の現状を、危機感を持って周知すべきだというのが、この一番上にありますね。この御意見の、恐らくおっしゃりたいことの一つというのは、そこなんです。だから、現状はこうなっているよということを、区民がみんな知ること、そこも大事だろうということです。

だから、いろいろなレベルで、区民としてそういう相談に行くということは、ある意味では権利でもあるしね。逆にそういう風土を作っていくことも区民の責任でもあるという形にしていけば、当然それを利用できるだろうと。ただ、それは今の状況では、なかなか難儀だろうと思うんですね。

何となく気後れして相談に行くこと自身が、何か後ろめたいような気持ちになるというようなことがなくなるとね。それは理想論だと言われるかもしれない。何か、そのあたりの啓発・広報というのが、できないかなという。

委員

ある時に、後ろめたいといった話を聞いたことがあったんですけども、こういうふうな相談窓口は幾らでもあるんだけど、行くこと自体に抵抗があるという感じで、どうにもならないところまで行って、事件になったりするということなんですけれども、それより前に相談できるようなことを、区として発信できればいいんじゃないか。そんな感じに思っています。

委員

私なんかは町会と育成会、地域の中でしか活動するところがありませんので、その中で、あそこのうちの子どもは最近元気がないのよねとか、あそこのうちの子どもは最近学校へ行ってないんじゃないという話を聞いたりします。それこそ先ほど、おっしゃっていたように、私はこの委員会の中で場所がわかりにくいと、発言したんですけども、これが、あそこの5階、6階じゃなくて、それこそ1階にあるべきだと思うし、ガラス張りで広く、パンフレットでも置いて、自分の子どもに関係はないけれども、ちょっと立ち寄ってパンフレットを2、3枚持って行って、ちょっと置いておこうかなというステーションだと、私は素晴らしいなと思っております。

委員

体験談とか、すごくいいなと思うんですね。先ほどの子育て支援の対象は、子育て中の引きこもりがちの親だとか、それとも若者なのかの違いはあるんですけども、すごく共通しているところがあるなと思っています。とにかく気軽に相談できるんですよというところを、そんなに問題なくても、大きくなってもいいから、気軽にいいからとにかく電話してちょうだいという感じのことを一生懸命、パンフレットを工夫しながら作っている最中です。それをどこに置くのというと、大体そういう方は、余り外出はされないけれども、出ることはあるかと。そういう時に、どこに置けば一番目に触れるのかと、今皆で考えてプールのしているんです。若者の場合も、たまに出てこられるとあって、どこへ行くんだというのを、よく調査分析して効果的な所に置くというのは、調査にちょっと時間がかかるかもしれませんがけれども、具体的なこととしてできるんじゃないかなと思います。

それと、若者に限らず区民の人が、大したところに相談するわけじゃないんだけど、でもちょっとどうしようかなというのは、多分他にもあるような気がする。子育てのちょっとした悩み、若者自身のちょっとした悩み、何とかのちょっとした悩みというのはそれぞれあると思われるんです。

高齢者に対しては比較的、地域包括とかができて、行きやすくなったから、他の生活に関すること、多分いろいろあるだろうと。

私も区報を最近くまなく見ておりますが、いろいろな支援事業とか情報が入っていて、それは区として出すべきものというか、出せる方法で出していらっしゃると思うんです。でも、体験談というのは、多分区報では載せられないと思うんですね。例えば、こういうことで困ったときに、区にこういうのがあってすごくよかったとか、親としてこういうのに悩んだんだけど、こういう時にこういうのを利用してよかったとか、そういうのを民間と協力して作り、区報と同じタイミングで入れるとか、区と一体の行動スタイルで出さない限りは、こういうたぐいの広報というのはすごくしづらいんじゃないかなと。多分、それが一般のパンフレットとかよりは、効果的ではないか。

委員

私、半年ぐらい前でしょうか。都庁で、引きこもりの子どもについての会があったんですね。広い会場が、満員だったんです。関係者と親が、対象だったんです。講演会とか体験談の後に、親対象の相談会というのが個別にあったんですが、物すごく熱心で、超満員だったんです。それだけ困っている方が多いんだなと思ひまして、それは多分広報とかを見て、都

でやったものですから、都へ申し込みされたと思うんですが、まめにそういう広報を出していけば、そういう相談会もあるんだよということが、そういうことを気にしている方にも届くかな。

福富部会長

それはそうですね。だから、もっと言うと、体験談みたいなものをどう知らせるかという、やっぱり体験談というか、その方の体験を語るということが、意味があると思うんです。だから、それは文字化すると、本物ではなくなるわけでしてね、そして、区が主催するなり後援して、いろいろな所で、定期的にも体験を語るような会を催すということは、ひとつ知らせることになる。

委員

関係者とか、一般の方が行きやすいという、関係する親だけというのではなくてね。

福富部会長

その対象は、いろいろなレベルがあっていいと思うんですよ。いろいろな人を対象にして、そういう体験を語るような、講演会というんじゃないけれどもね。

委員

小さい会でもいいしね。

福富部会長

小さい会でもいいですけども、いろいろなレベルがあっていいと思うんです。そういうものが一つの広報にもなり、風土づくりにもつながる。

委員

若者館と出したのは私なんですけど、箱物であり予算の問題があるので、簡単にはできないということなんですけど、大きくなってもいいので若者だけじゃなくても音楽ができる設備とか、あとカウンセリングができる部屋とか、パソコンがたくさん置いてある部屋とか、若者が来やすい環境があれば、その中に相談というものがあれば来やすいかなというふうに考えて、この若者館というのを考えてみたんです。それで、だめなら図書館がいいかなと考えています。図書館というのは、比較的若者が集まるんですね。そういうところに、こういうパンフレットとか置くと意外にはけるかなという感じがしたので、それも意見として書かせていただいたんですが、そういうところに相談コーナーがちょっとあっても、本を借りに来たついでに相談できるみたいな環境があったらいいかなと考えたんですよね。比較的じゃなくて、若者を見かけるのは本当に図書館なんです。

福富部会長

よくわかります。

ただ、そういう若者の居場所を作るということは、それ自身私は反対ではないんですけれども、それをすることが目的化してはいけないわけですよ。だから、若者の居場所というのは一体何なんだろうかという議論がもう一方においてないので、では若者が集まれるような何か空間、物理的な空間を作っていきますよというようなことで、どうも今まで終わってきたんじゃないかなと思うんです。

要するに若者対策というと、では若者居場所づくり、空間を作る。でも、もっと言うと若者の居場所というのは何なのとかね。どういう人がそこを利用するのとか、それを利用するとどういう効果があるのかとか、そういう議論というのは意外としていなかったんじゃないか。非常に辛口で言えば、何か作って、作りましたと、行政として、大人として、これである意味では責任を果たしましたよということが、今までだったのではなからうか。ただ、これからはそうじゃなくて、若者の居場所というのは、なぜ必要なのとかの議論が重要ではなからうか。

委員

今、部会長がおっしゃったとおり、例えばこういう場所を作るんだったら、そういう世代の人たちが参画して、ああでもないこうでもないと言って作る、そういう立ち上げの時から、その当事者年代の人たちが思いっきりかかわってもらわないと、適した場所というのは多分できないんだらうなと感じているんです。

さっきの、どういう層を考えているんですかというお話と関連するんですが、若い人たちは、ちょっと個性的だけれども、少なくとも生きる意欲はあります、でも、社会的にいうと、ちょっと変わったやつみたいな、そういう人たちも多いじゃないですか。以前公演で聞いたのですが、そういう人たちとかであれば、イギリスにあるんですけれども、HUBという名称で、何かやりたいと思っている人たちが自由に来て情報交換をしたり、ネットもできるし、それこそ自分で仲間を見つけて、新しい社会起業家というと格好よ過ぎるんですけれども、「何か新しいことを始めようぜ」みたいな感じの所があるそうです。そういった子たちが自分で模索しながらできる場の提供と、コーディネーターという人がいて、何か聞いてくれれば、こういうのがあるよ、こういうところに行ってみたらみたいな感じで、余り過度にああしろこうしろは言わないんだけど、ちょっとした世話役のコーディネーターさんがあそここの場所にいるみたいな、そういう場所があることを知ったんですね。

これはいいなと、新宿なんか、若い人が来やすい場所ですし、四谷ひろばのように、元学校のところなんかでそういうのができれば、非常にオープンで自由度が高く、何でも相談ができるというような空間があれば、いいのかなと。それはただし、予防であって、引きこもりがちの方にはちょっと不適なんですけれども。

福富部会長

予防という面でいうと、今日の資料2を御覧いただきたいんですけども、つい最近こんな調査があったんですね。一言で言うと、大人に子どもの頃を振り返ってもらって調査して、子どもの頃にいろいろ自然体験なんかすると、それは子どもの頃だけじゃなくて大人になってからも、発想豊かな大人になるということは、確かに関連があったという調査なんですね。

これはまさに予防なんですよ。

でも、これがあると、すぐ皆、じゃ子どもに自然体験させればいいという発想になっちゃうと、これはまた余りにも単純過ぎる。

委員

小学校とか中学校でも、こういう総合学習みたいなのをやっていますよね。

福富部会長

やっていますよ。だから、改めて、子どもの頃のいろいろな体験というのは決して無意味ではないということが、実際にデータとして現れた調査でもある。

委員

でも、このルールに乗り切れなかった、何人かが、そうではない思考を持ち、そうではない行動をする人が、今かなりの部分を占めているというところに問題があるというふうに思います。

厚生労働省委託の「しんじゅくサポートステーション」が、高田馬場にもあり、四谷にもありというのを、徐々に広げれば、ちょっと行きやすくなるんじゃないかな。

それが、例えば6階だろうが1階だろうが、地下だろうが、どんな所でもいいから、何個かあればいいなと思うんですね。それは難しいことでしょうけれども。

委員

うちのすぐ近くに、もう8年間引きこもっている子がいるんですよ。サポートステーションの場所とかを、私も知らなかったものですから、見学に行った後、資料を持ってお母さんと会って、すぐ、いろいろ話をしました。そうしたら、母親が言うことには、これは誰も知らない場所だから行ってみようかなと。そういう事実もあるわけですよ。だから、その親に

すると、それに来るまでの間にすごく迷って、いろいろな所に行っていて、だから、私たちが考えるのと違う、その親子にしたらば、誰も知らない内緒のところだから、それじゃちょっとアクセスしてみようかなとか、そういう気持ちもあるので。

福富部会長

だから、その裏には、やっぱりそういうところを利用するというような後ろめたさがあるね。

委員

そうです。あるんです。

福富部会長

そこを、もう少し地域全体で支え合えるような、精神的な土壌を作れないだろうか。

委員

さっきのを聞いていると、当該の親御さんじゃない方が、こういうのもあるのねという、ちょっと聞いておこうと、近所の何々さんが息子さんのことで困っていたわとかいって、資料なんかを取れるように、置いておいたほうがいい。

だけど、相談する場所は1カ所じゃなくて、知られていない今のような場所のほうが良いと。また、地域包括支援センターのように、まだ高齢者しかやっていないんですけれども、そういうところにもあって、入れるのもいいんじゃないかなと。

委員

私が最初に言ったのは、結局やれないというのはお金の問題が絡んでいて、安い階でしか事業ができない。地下とか1階よりは上だということを申し上げたかったんで、何かそこで新宿区が一つ出せる手立てがないかということなので、物理的にもいたし方なくて、わかりづらい場所なんだと思うんです。

それで、先ほど言われたのはまさにそのとおりで、僕らは1階にしたらいいだろうとか地下にしたらいいだろうと勝手に言うけれども、親御さんにしてみたら触れられたくないという部分も、やっぱり絶えず気かけなきゃいけないのかなというところもあると。

委員

そうなんです。ただ、お母さんは、私はよく知っているから、長いこと知っているから、今までいろいろなことで、私も接触しているんですよ。

福富部会長

今日、なぜそんな話に持ってきたかと、例が余りよくないのかもしれないけれども、女性に対する嫌がらせ、セクシュアルハラスメントみたいなものがある。あれはセクシュアルハ

ラスメントという概念を出したのは、とても意味があるわけです。今まで何となく、そういうもので嫌な思いをしていた女性たちが、その嫌だということが、これはセクシュアルハラスメントなんですよという概念を得たことによって、これは堂々と言えることなんだという雰囲気が出てきたという効果があったんです。あの言葉というのは、すごく大事な意味を持っていたんだと思うんですね。

そういうような発想を変えることによって、引きこもりとかに対して区がもう少しそれを、恥ずかしいことでも何でもないんだという、そういうような議論というか発想ができるような働きかけも必要ではないのかと。

委員

先ほどから聞いていると、引きこもりということに限定すれば、要するにこれは重大な問題だということですが、こういう会議、あるいは区が何かやるときに、引きこもりの人から意見とかそういうものを求めているという場があるんでしょうかね。僕は、先ほど、どなたかが言った、こちらから関係者の言葉とか思いだとかを、そうだろうなという形でやっている。だから箱物だけ作ればいいとなっちゃう。場所の高いところ、低いところでもいいんですけど、作っただけになっちゃう。利用しないのは利用しないほうが悪いんだと。そうじゃなくて、利用者がどんな形をしたら利用しやすくなるのかを聞いてあげなければ、幾ら議論していても意味がない。例えば、健常者が障害者のことを思っているいるけれども、障害者は違うんだと。というのは、歩道にいっぱい、何かありますよね、黄色いの。あれ見て、あそこを通ってくる障害者の目の悪い方はいないんです。今日、来る時に、ずっと見ていたんですけども、その目の悪い方は、自分がいつも利用している駅はもうわかっているんです。あれは障害者じゃなくて、健常者が見ている。だから、目の悪い方は、初めてここに来た時にどうしたらいいんだということを、彼らたちが何を望んでいるかということ聞いてあげると、もっと違うと思うんですね。

委員

私も今の意見に似たところなんですけれども、引きこもりという言葉自体が、イメージでしかないと思うんですね。広過ぎて、引きこもりと一言で言えない部分がありますので、だからもうちょっと細かく分けて、例えば学生だと引きこもりというか不登校ですよ。不登校だったら、原因は学力の低下だったりいじめだったり、社会人だったら、不登校じゃなくて、ニートと呼ばれるのか何と呼ばれるのか、それぞれに対処の方法というのは全く違うと思うんですよ。サポートステーションみたいなものがあって、行ける人というのは、前に

も言ったと思うんですけども、引きこもりじゃないと思うんですよね。引きこもりをどう捉えるかということで、本人が引きこもりだと思っている人もいれば、親が引きこもりだと思っていて、本人は思っていない。親も子どもも引きこもりだと思っていなくて、第三者から見て、あそこは引きこもっている。いろいろなパターンがあると思うんです。

だから、さっきも言われたように、体験談というのはすごく大事だと思うんですよね。症状によって、自分がどこに当てはまるんだろうというのを、まず体験談で知る。自分の症状が自分でわからないことには、治療というか完治できないと思いますよね。恐らくこういう問題というのは、物を与えたから引きこもりが治るというものではないと思うんです。自分の力で治癒していかなければ、恐らく克服できないことだと思うので、自然治癒するような材料を、どんどん周りに置いてあげるのが、恐らく自分でチャンスを掴むことになるのかなと思うんです。

社会人になって何年も仕事をしていない知り合いが、何人かいるんですけども、本人は自覚がある人と自覚がない人がいます。焦っている人もいれば、全然引きこもっているという自覚もなく、毎日ただ家にいて、衣食住は満たされているわけですから、生活している。こっちから見ると、どう見ても引きこもっているだろうと思うんだけど、本人は思っていないんですね。だから全然変わらない。何かきっかけをもっと与えられればいいなと話をするんですけども、本人に自覚がないですから、全然、何年も状況が変わらないんです。きっかけみたいなものが、治療する薬になっていくのではないかなと思うんです。

委員

今、各論的なことを話し合っているわけですけども、場所の問題と内容と対象者と、この3点に注目してみたいと思います。

場所につきましては、自分がその立場ですと、あの場所、この場所と特定されてしまうと、自分なりあるいは家族に引きこもり等がいた場合に、なかなか行きづらいなと自分では思います。じゃ、それでいいかということ、そうじゃなくて、私はやはり、もっと利便性のあるところへ逆に打って出て、ある程度お金がかかっても、誰でも、いつでも寄れて、資料を取り、あるいは相談できる、そういう場所選びの問題を注目してみたいと思っております。

それから、2点目は内容ですけども、私は、ただ資料を置けばいいということではないと思うんです。窓口を開ければいいんだということではなくて、やはり見たり、聞かせたり、できればその体験、こういうものを組み合わせていくべきではないかというように思います。

それでは何かもっといい方法がないかと考えていたんですけども、このサポートステー

ションに類似した施設併合等できれば、非常に活用しやすくなるのではないかなということも、私は考えてみました。

それから、対象者なんですけれども、これは部会でまとめた意見だと思うんですけれども、中学生の職場体験、こういうことがありますけれども、できれば、なるべく多くの人たちの体験をさせる。そのような方法で検討すると、より予防的な効果があるのではないかなと思うんです。具体的に、1, 2年生というのは無理かもしれません。しかしながら、最近報道されるような、6年生で、いじめで自殺があったというようなことまで含めると、やはり5, 6年生あたりから入れてもいいのかなと思いますし、また余り年齢的にきっちと特定するのではなくて、対象者を選ぶのにゆとりを持った、窓口を広げる必要があるのではないかなというように考えます。

それから、資料1の普及啓発をやっているわけなんですけれども、さらに2, 3, 4と課題があるわけですね。そうしますと、これから進めていくことはみんな重要なことだと私は思う、そういう認識をしているんです。その上に立って、これを進めるに当たって、事務局として、特にこの辺がということがあれば、その辺を一つ議論するのがいいかなと思うんです。というのは、一つひとつこれを出しますと、1項目に対して10ぐらいの意見がありますので、大事なんですけれども難しい面があります。逆にこれを全体的に進めるんだという考えのもとに、この中でこの辺が一番難しいかな、またネックがあるかなというところがあったら御指摘いただいて、それを中心に、この部会としてまとめて、協議会にぶつけるという持っている方はいかがでしょう。

福富部会長

そこに関しましては、残念ながらそれだけの時間的なゆとりがないんです。今日、部会として、これが最後ですから。ちょっと難しいんじゃないかと。

今のところ部会としては網羅的なところで、こういう問題、こういう問題があるよというような形をとにかく今は出す。それをどう集約していくのか、あるいは重点の議論を深めていくというのは次の段階になるのかなという気がするんです。

今ここでそれは、そこまでは難しい。

委員

私も時間がないという前提のもとに、一つひとつやることも大事なんだけれども、時間がなければ、それだったら逆にこれは全部進めるんだ、こういう前提のもとに、その中でも、ここだけはこのものがあつたら、そこを議論すべきでは。

福富部会長

本当は、それができればいいんですが、まだそこまで集約されていない段階なんじゃないでしょうか。非常に大きな問題ですから、もう少しいろいろな観点から議論が必要でしょう。

先ほど来、場所の話が出ていますけれども、極論ですけれども、場所はどこでもいいと僕は思うんです。1階に入れなきゃいけないという議論もないし、上でなきゃいけないというものもないし、いろいろな場所で、いろいろなものが開かれればいいということであって、こういうものはこうでなきゃいけないという場所というのはないんだろうと思うんですね。

ただ、それは、今度は予算の問題とかいろいろありますから難しいと思いますけれども、どの場所がいいのかという議論というのは、余りクリエイティブな議論ではないと思います。

委員

中学生の職場体験ですけれども、以前に話したかもしれませんけれども、日赤で手伝いをしていたら、イタリアに留学している高校生が帰ってきて、このボランティアをすると学科に点を入れられて、いろいろなことになるというのを言っていたんです。中学生だけじゃなくて、社会体験も学科に組み入れて、直接の職場体験かもしれないし、それはボランティアなのかもしれないけれども、そういうものがあって、それは引きこもりとか何とかは関係なくですけれども、体験学習みたいなものはずっとあるといいなと思います。それは一般的ですけれども、ごめんなさい。

部会長

体験させることは大事だと思うんですけれども、それを次にどう生かすか。例えば体験した、ボランティアしたことをどう評価するか。学校内で評価するのか、それとも行政が全体的に評価するのか、表彰等するのか、そういうことまですると広がり方が違うと思うんです。

委員

ただ、留学していてこちらに帰ってから、何回したのと聞いたら、もう10回以上、夏休み中それを熱心に、ちょっと体験するんじゃなくて、遊びを置いておいてそういうことをしていましたから、ちょっと感激したんです。

その職場体験の質にもよると思いますよね。ただ、一定なおざりにしただけでは、効果はないと思います。すみません、貴重な時間を。

委員

各論を一つしていいですかね。今、場所の問題が議論の中心だったんですけれども、あえて危険を承知で、メールの世界というのが、一つあるかなと思っていて、もしかして既存の

メール相談みたいなのが引きこもりの人からあるかもしれないんですけども、彼らは引きこもりで、一番社会の窓というところとやっぱりインターネットとか、あの辺だと思うんです。ただ、この世界というのはすごく匿名性が高いし、バーチャルな世界で、メール相談というのは危険で、いたずらもいっぱい入っているし、返すのも大変なんですけれども、ただ、引きこもりの人たちを外の世界にちょっとでも引き出していくには、メールというツールは外せないというか、可能性があるところで、そこは少し考えていただけたかなと思うんです。

委員

実は、児童相談センターは、メール相談というのは余り受け付けませんが、それでも入ってくるんですよ。その後、調査が物すごく難しく、ちょっと頭を抱えているんです。しかし、今の時代に、このメディアはちょっと外せないかなと。可能性として、ここで接点ができ、こういう場所があるから来てみようという、その後つながっていくといいんだけどなど、感想めいた話なんですけれども。

福富部会長

いろいろなレベルで、いろいろ考えていくということが、大事だと思うんです。だから、メールだからだめだということには、ならないだろうと思うんです。じゃ、聞けばいいのかという話でもないわけで、聞くことも大事だし、いろいろなことを、だから特効薬というものは、これに対するものはないので、そういうものを行政が考えるということ自身に一つ意義があって、それを、この場だけで考えて終わっただけでは意味がないわけで、それをどう知らしめていくのかということ、ない知恵を絞って考えていこうよという議論だと思うんですけれどもね。

委員

今、メールの相談というのは御本人から出されたということが、わからないということもありますよね。

委員

そういうところが難しいんですよ。そこを考えながらやらないと。

委員

要するに、そういうところへアクセスしたいというのは、何か友達がいたり、それから兄弟だったり、あるいは両親だったりする場合がありますよね。何かアクセスしたい。だから、先ほど部会長が言ったように、聞いているだけじゃということなんだけれども、聞いているだけでも、もしかすると効果があるかもしれないですよ。だから、こちらからのアドバ

イスはともかくとして、聞くあるいは受け付けるということだけでも、その窓口がそこに一つあったというだけでもね。

福富部会長

昔、電話相談なんてなかったんですよ。あれも導入した頃というのは非常に拒否があって、本当にできるのとか、本当に本人の問題なのかどうかとか、プライバシーをどうする、いろいろ悩みがあって、そのパイオニア的なものというのはすごく不安がある。しかし、選択肢の一つとしてメールというツールも、これからの時代には考えられる問題ではないかと。

体験というのも必要だし、学校もやっているわけだけれども、日本の教育のありようというのはすごく不安を感じるんです。実は総合的な学習の時間という形でもって、学力よりも生きる力だとかそういうのが大事だということで、大英断してあの時間を作ったんですね。ところが、今の時代になると学力が少し下がったという実態があると、あの時間を削って今度は学力に移っていくという教育のゆらぎというか、10年、20年先を見据えてやったはずなんだけれどもということを考えると、せめて新宿区で教育について、どのようなある方針ができるかぐらいは考えることができるだろうと。文部科学省との関係で、学校教育というのは、東京都の場合にはいろいろ締めつけがあるものですから、非常に難しいけれども、じゃそういう中で区として何ができるのかという議論も当然しなきゃいけないだろうと思うんです。新宿区はそういう意味ではかなり先取りして、幼保一元化みたいなものも現に行われているという状況、あれは一つの先駆的な試みですよ。そういう、できるところを探っていくということが、必要なのかと思います。

委員

ウェブは本当に受け皿、最初のとっかかりとして大きいとあって、多分、これから具体的に行くときにいろいろなツールがある。携帯メール、携帯サイトも含めて、多分それぞれに適したタイプで、それぞれの媒体の限界というか、それをきちんと定めれば、うまくあいにパズルのように組み合わせさせて、なるべく落ちがない、いろいろな人が選択できて、アプローチできる入り口を揃えることはできるだろうなと思っています。それと、今日ここまで、私も話してきて、お話も伺い、建物のことも含めて現実的にはお金という問題も一つある中で、でもできることという、今あるリソースの活用度を上げる工夫をしていかなければならないだろうなと感じています。

その点でいくと、一つは既存の、特に引きこもりがちな、あるいは不登校の子どもさん向けに活動されている団体さんって、前回いただいた資料にも幾つか書いてあったと思うんで

すけれども、ずっと支援者の立場で活動されていらっしやったりして、自分なんかよりも、はるかにそのジャンルのことに精通している方がいらっしやる。その方が、ここにいないというのは、なぜかしらというのを、漠然と感じていたんです。せっかく地域に事務所を置いて、そういった活動をされている、いわば準専門家の方もいらっしやるので、そういった方の知識や経験というものを、もっと区として活用しないと、もったいないじゃないかということが一つ。

あとは、先ほどの情報提供のあり方を考えてみても、なるべくお金をかけないでいくには、なるべく徒歩圏で区民の人がふらりと寄って、いろいろな暮らしに関する情報が、紙媒体で取れる場所があれば、それはそこが便利なんだろうと。今でいくと地域センターとか、区役所はもちろんですけれども、あとは介護、高齢者系でいくと包括支援センター。何もかも総花的に情報を入れるというのはとても大変かもしれないんですけれども、整理するということは、子どものことに限らずもうちょっとできないだろうか。地域の方のお気持ちがあったとしても、余り遠いと、わざわざ電車に乗って、バスに乗ってというのも、ハードルが高いということを考えると、もう少し今ある区の施設を使って情報網の拠点という形で活用するといいんじゃないかな。

福富部会長

これはこれで全く意味がないわけではないと思うんですね。こういう場の中に、今度は当事者というか経験者というか、そういう方も交えての話し合いも、大事だという気がするんです。

そういう方を今度はお招きするなり、あるいはこちらが行くなりして、そういう方の話を伺うという機会を作ることは、この協議会としても大事なんじゃないかという提言はいいんじゃないかと思うんです。

委員

先日テレビで、留学した後のお友達づくりというのをやっていたんですが、入学式にはもう友達ができているという話です。というのは、インターネットサイトで、大学に入りましたら仲間になりませんかということで、もう入学した時にはグループができているという話。それを聞くと私たちはとても追いつかない、今の現代の流れ、若者たちのやっていることと言うのに全然追いついていない。

福富部会長

そうです。だから、さっき言ったのは、それも全部含めてです。

委員

引きこもりじゃなくて、健全な若者の考えていること、思っていることも含めて、聞いてみるのもいいんじゃないかなと思って。

委員

それと関連していると思うんですが、高田馬場の若者サポートステーションに行きましたね。そこで実際に、自立しようとして一生懸命取り組んでいる人のお話を聞かせていただいて、皆さんも聞いて帰ったと思うんですが、それと同じようなことで、ある委員会で施設見学に行ったんです。施設の案内の後に、ここに来た引きこもりの子どもと、そうでない子どもと一緒に1週間生活した時のビデオがあるから、ぜひ見てくださいと言うので、私たちは見せていただきました。引きこもりの子どもと、そうでない子どもとの15人ぐらいのグループで生活しているビデオが撮ってあって、最初は口も聞けない、仲間にも入れない、そのうち自分がここにいることが、皆に迷惑をかけるから帰りたいと泣き出す子もいる。だけど、そんなことないよ、君だって役に立つことがあるだろうと、少しずつ手を差し伸べてやって、1週間たったら、僕は役に立っているんだねと言って、皆と一緒に行動がとれて、元気よく帰っていく内容でした。

ですから、今からでは手遅れなんですけど、そうやっているいろいろな形で、いろいろな引きこもりの、ビデオでもいいし、経験者の話でもいいし、実際に会いに行くにしてもいいし、もっと実際のことを、私たちの目を見て、耳で聞くということが、いろいろな形で委員会に活用できるんじゃないかなと思いました。

活字の上で何%、東京都の引きこもりが何%と活字でデータを出すよりも、少しでもいいから、そういうところへ行って1人でも2人でも子どもと接して、生の声を聞いて、どうしてあげたらいいかなというのも必要だったと、先週ビデオを見た時に感じました。たまたまこういう委員会でこういうのに取り組んでいたから、他人よりも一生懸命見たんですけれども、そういうふうに感じて帰ってきました。

委員

コズミックセンターの中に通級学級という、不登校の子どもが通うスクールがあるんですけども、その先生と、よく話をする機会があります。先生が言うには、いじめ以外の不登校の子というのは、大半は学力が追いつけなくて、学校に行けない子がほとんどだと言うんです。とにかく学力を上げてあげると、学校に復帰できる子がほとんどだという話を聞いて、学力格差というのも深刻な問題なのかなと感じているんです。

さっきのメールの話に戻るんですけども、例えば気軽にアクセスできるようなものを作って、100問ぐらいの引きこもり度テストみたいなのにクリックして、自分が、丸が5個あったら5個のほうに進んでいくと、自分がどのぐらいの引きこもり度なのか。健常者も恐らく潜在的な引きこもりのものを、持っていると思うんですね。そういうところから、一步前に出るというシステムを作っても、おもしろいのかなと思ったんですけども。

福富部会長

おもしろいとは思うんですけども。

委員

メディアでもそうですし、いろいろなところで目についてはいると思うんで、そういう施設があることを、知らない人はいないと思うんですよ。恐らく一步が出せない。いろいろなセンターが充実していても、わかってはいるけれども、その一步が出せないから、結局引きこもりから脱せない。

福富部会長

例えば、戦前から比べるとというのは、ちょっと大きいですけれども、教育だけに関していうと、教育というのはすばらしく、教材にしたって教育方法にしたって、建物にしたって、物すごくよくなっているんです。少なくとも日本の教育というのは、物すごく形、制度、内容という意味では、みんなすばらしい教育の進展があったはずなんですね。じゃ、子どもたちが本当によく育って、よくなっているのかというと、一方において、そうやったにもかかわらず不登校が出、いじめが出、いろいろなものが出てきちゃっているんです。そうすると、この教育の進歩とかいうのは、一体何だったんだろうか。何かその中に欠落していた議論が、あったというように思えてならないんですね。

非常に嫌な言い方をすると、子どもたちを悪くするために日本の教育が進展してきたとも、受け取れかねない。居場所と称しているいろいろなものが作られた、何を作った、これも作った、いろいろなものや制度は整備された。でも、それでいいんだろうかという問題なんですね。

委員

間違っただけでしょうかね。

福富部会長

それがどういう間違いなのか。その議論を、どこかで真剣にしなきゃいけないんだろうと思うんですね。ある意味では子どもたちを、救ってきたことが、本当によかったのか、何をしようと、どういう子どもに育てようとしたのかということが、実は落とし穴的なものがあ

ったのかと思えてならないんですよね。

委員

部会長にお聞きしたいんですけども、私たちが、子どもを育てていた時に偏差値というものの信仰みたいなものがありました。偏差値がいい子どもを持っていると、変な自慢というか、いいんじゃないかというふうな。その後、子どもが育ち、既に大人になっていますから、今現在はどうかというのにはわかりませんが。

福富部会長

今でも、偏差値は厳然とした地位を確立していて、例えば三者会議ではそうですね。偏差値というのがある。

委員

そこで私、中学校の先生が進学の時に、お宅の子ども考えなさいと言われた時のことをちょっと思うんですけども、子どもの一生は子どもの一生なのだから、学校で決めるわけではないと言われたところがあって、職を決めるのも、子どもが何をしたいか、何が好きかというのをまず考えて、偏差値がいいとか悪いとかじゃなく、進む方向性を考えるのが一番いいと言われたような気がするんですけども、偏差値に惑わされた親もいたんじゃないかというのがあります。

福富部会長

一つの正論じゃないですか。だから、日本というのは、すごく珍しいと思うんですね。高校進学率が98%とか100%近くになっている。今の政権は高校無償化、あれを義務教育に統一してやっちゃうという発想が自然に入り込んでいく。大学に行くことも、ほとんど大学も無数に開かれているし、分数の割り算ができない大学生もいるということを嘆くこと自身の問題性に気づいていない。一体、大学というのは何なのという議論はないままに、みんな大学に行くようになってきた。そして、そこに落ちこぼれ、誰かおっしゃったけれども、学力の格差がどんどんついていくわけですね。そういう状況を一方において作ってきているわけですね。そのところに気づくというか、その問題というのはすごく大きい。

ただ、これはそういうことを話すと、空理空論になっちゃうということは重々承知の上ですけども、でもそこが問題として大きいんじゃないかと思うんですね。

委員

もう一つ、質問いいですか。学力と偏差値とは違いますか。生きる力というか、学力。

福富部会長

学力というのは何かというと、ある教科なら教科に関して、学力テストによってはかられた点数が学力です。だから、人間の能力の中で、いろいろな能力があるわけでしょう。走る能力もあるし、長く息をとめていられるという能力もあるし、いろいろな能力がある中で、ある教科についての学力テストというものが実施されて、その点数。だから、非常に人間のある側面をはかっている分には間違いないですね。それが学力。

委員

そっちに偏り過ぎたものを、反省しなきゃいけない部分がある。

福富部会長

そこをどうやって反省するかです。

委員

いいですか。ちょっと、もとへ戻るじゃないんですが、引きこもりについて児童相談所と区のほうにお聞きしたいんですけども、同じ質問です。例えば親御さんでも本人からでも、うちの息子がちょっと引きこもりなんだけれども、相談したいなという電話がかかってきたときの対応はどうしているんですか。

委員

児童相談センターでの対応では、引きこもりというのは、さっきの議論と同じようにすごくレベル感あって、まずお母さんに話をしに来てくれませんかということで親御さんから話を聞いて、それでレベル感というか内容を精査する。例えば、専門機関で心理職、児童心理司がいて、医師もいるんですけども、私ども医師や心理司がかかわったほうがいいと判断した場合は、児童福祉司がまず家庭訪問をやって、それも何回も行くんですよ、毎月1回ぐらい。最初は全然会えない。例えば、開かずのふすまとか、開かない。児童相談センターの何々が来たよと言っても、何にも応じない。2回目、2回目もまた来たよ。3回目ぐらいかな。返事は「あー」とか、「うー」とかと言うぐらいです。それを5、6回繰り返すと出てきてくまして、学校に通えるようになったというのが成功事例であるんです。それだけでも、物すごい手間暇かかるんです。

嫌らしい話をする、コストも物すごくかかる。虐待対応する中で、その分を割いてやる。これはちょっと危険性があるな、親御さんにもちょっと問題があるなとか、ちょっと虐待的な要素があるなという時は、積極的に介入しよう。

そうじゃない場合は、私ども、18歳未満のお子さんの全部の相談というのが看板にはある

んですけども、重点的にやらざるを得ないという状況の中で、このレベルですと、例えば、他機関の教育センターさんにつながりますからといって、バトンタッチをさせていただいてどうか、そういうことをやりました。

委員

僕がお聞きしたかったのは、実際に、どういう形で流れているのかということだったんですけども、今児童相談所は専門家として対応しているということですね。

委員

そうですね。

委員

区のほうはどうなんですか。例えば、3209-1111に電話がかかってきた場合に、交換手はどこにつながんでしょうか。

事務局

今お尋ねの件が児童であれば、それなりのところにつなげられる可能性はあります。児童でなければ、どこがそれを受けられるかというのは非常に難しいんです。引きこもっていて、なおかつ20歳を過ぎていて、どうしましょうかといったときには、強引にそれを、勤めていないから就労支援ですねということで、就労支援のほうに回す可能性はありますけれども、ただ、就労支援の担当の者に回したとしても、本当に御家庭の方がお困りの事態の核心に触れるような御相談として受けられるかということ、それは非常に難しいところです。ですから、そういう状況があるということで、今こういった、皆様にご議論いただいているところが、今社会問題として出ているんじゃないかと思うんです。

委員

そうですね。ありがとうございました。

先生が心配していたように、いいものができても、それがうまく生かされない、流れてしまうということになるんですよね。というのは、やはり相談する側、受ける側、その辺がしっかりしていないと、特に受ける側が、しっかりしていないとだめだと、こういう話になるんじゃないでしょうか。

なぜかという、相談する側は、わらをも掴みたいつもりで来るわけです。やっぱり最初の対応がきちんとしていないと、たらい回しになっちゃうんですよ、あそこ行ったり、ここへ行ったり。その時に把握できるところが区の中に、そういう部署があれば、そこにつながばいいんです。例えば、今子ども家庭課というところの相談窓口、最初に部会長が言ったよ

うに、そこでもって、どの程度の段階なのかというのが把握できれば、じゃお伺いしましょうとか、児童相談所がありますから、そこへ連絡しますから行きましょうという形でもってやったださるといいんですけども、とりあえず来た方には、こういうところだけ教えて、それでさよならになってしまっはいけない。

福富部会長

恐らく区で苦慮しているのは、そこだと思っんです。先ほど事務局から話のあった、児童の場合はそれなりのルートはありますよと。ところが、相手が成人の、例えば25、30になっている人の場合に、どういう悩みなのかということ自身が、受けてもわからないんじゃないでしょうか、いろいろなレベルがあるから。

だから、はっきりと引きこもりですということを書いてくれるならまだしも、引きこもりに対する対応策というのは、窓口を作ってこうすればいいということがわからないような状態にあるんだろうと思っんです。うちの子どもが引きこもりですけども、何とかしてくれませんか、どこに相談しに行ったらいいんですかということを書われれば、具体的にそれは割り振りができると思っんですけども、そこも認識していないような段階で電話されても、これは非常に困る。

委員

それは困りますよね。

福富部会長

それが、だから特に相手が成人の場合は、いろいろ難しくなるんじゃないか。

委員

こういう問題に取り組んでいるわけですよ。それを学生さんだから受けます。じゃ、若者になったら、私たちちょっとというのは、矛盾していますね。

福富部会長

だから、こういう会議で、そういう者たちへの支援について、行政がどのような体制を作っていけるか意見を出しあう必要がある。

委員

実際に相談をしていない人たちは、実際はどのぐらいの数があるか、わからないじゃないですか。仮にそれを行政の予算がなくなって、引きこもり対策というのがなくなった場合にどうなるということ想定してやっているんですか。引きこもりの対策を、やらなかった場合、センターもなく、相談所もないというのは、どういう社会になるんですかね。

ある程度危惧して、こういう対策をしているわけじゃないですか。その危惧というのは、どういことなんですか。もっと荒れた社会になるとか、経済効果が落ちるとか、どういうものを想定してこういう施策をしているのか。ちょっと今何気なく思ったんですけども。

福富部会長

4月に、若者支援の法律ができましたよね、その精神がそうなんじゃないでしょうか。なぜ法律が、できたかというみたいなの。

委員

区での実態数はわからない。

福富部会長

おっしゃる意味はよくわかるんですけども、国民が現に悩んでいる状況に対して為政者は、それを放置するというわけにはいかないんじゃないでしょうか。救いの手を何らかの形で求めている国民に対して、それはもうおまえたちの問題だからというので何もしないというのは、国家としての義務として、それはできないことなんじゃないか。数が多いか少ないかというのは、次の議論であって、一人でもそういうものに対して、わかった以上何らかの対応をするというのが、基本的に民主国家だと思うんです。

それはどこまで、どういうふうにするかということは、次の議論でしょうけれども、現に悩んでいるという者に対して、いるという事実をつかんだ以上、何らかの対策を講じるというのは行政の責任だろうと思うんです。責任というか、そのために我々は税金を払って行政に対して、何らかのことをしてくださいと委託しているわけです。そのための税金だと、僕は思っています。

委員

引きこもりというのは、どの辺のところを基本的には引きこもり、先ほどだれかが言った、個性的なこともあるだろうし、それからあとオタクという形の、それから本当に精神的なこと。それから、対人関係が下手だから、引きこもりだというラベルを貼られちゃう場合もある。先ほど僕も思ったんですけども、ここでいう対策というのは、どこら辺のところを、引きこもりの段階という第1段階、第2段階というのはつけられないかもしれませんが、すべてを網羅するのは難しいかなと思うんですよね。

委員

視察に行った時に、支援者の方ですか、学校でのつまずきが、その後ドミノ倒しのように続くとおっしゃっていた。学校でのつまずきのところを、早目に何とかしてあげたいなと。

それで私は、スクールソーシャルワーカーを全学校に設置したらどうかと、その一点張りで話をしているんですけども、先ほど私は家庭訪問、それはすごく時間をかけてやっと引き出したというお話しをしました。こういう成功事例はいっぱいあって、物すごく手間暇がかかる。本人から行くというのがなかなかできない人には、スクールソーシャルワーカーという方がいて、ちょっとこっちに来てみないかということで、訪問なり何なりして引き出してくるという動きをしていただくと随分違うかなと。

平たく言えば、おせっかいなんですよ。ほっといてくれとか言うんだけれども、それでも何とか言っていくうちに、ちょっと違うかなというふうなところを動かしていくというのは必要じゃないかなと思います。

委員

ソーシャルワーカーの資格というのは、臨床心理士ぐらいの資格がないとだめなんですか。

委員

社会福祉士、臨床心理士というのは、スクールカウンセラーですよ。スクールソーシャルワーカーというのは、社会との接点をつなぐワーカーなんです。臨床心理士というのは、内面の心のケアとかそっちのほうなので、スクールソーシャルワーカーというのは、人と社会をつなぐワーカーですから、それは社会福祉士の方がやっていただくのが一番望ましくて、ほかの区のことを言っちゃうと、ほかの区で設置しているところもあるんですよ。ただ、全校じゃなくて、とても全校はなかなかできないんですけども、グルーピングしてやっているという試みが始まっているので。

福富部会長

時間も大分迫ってきて、今日は、またまとまらないふうになりますが、いずれにしても今までのお話を伺っていて、行政として、この問題に対する対応をどうするか。既存のいろいろなサポートシステムを含めて、若者支援の窓口あるいはその具体の場所を、これからもっと充実させていく、そういう方向が一つ。それをただ作りっ放しではなくて、それをどのように知らしめるかという宣伝活動も必要であるということ。

そして、もう少しこの問題について深く議論していくためには、さらに継続的にこの議論をしなければ、解決はつかないということ。また、今後はこういう場の中に、ただ我々だけで考えるのではなくて、当事者あるいは関係者の意見を聞きに行く必要もあるということを感じ込みまして、協議会のほうにかけたいと思うんですね。

とても数回の議論で名案が出るなんていうものではないし、そう期待されても困るわけで

すけれども、もう少しこの問題について継続的に、焦点を絞っていくやり方も必要であるという問題等々を協議会全体のほうに報告したいと思うんです。

先ほど、引きこもりについての数ということが出ましたけれども、ここで東京都の調査があって、若者のうち0.72%、およそ2万5,000人が引きこもり状態にあるという、これはもう推計です。実際わからないわけです、もう推計するしかないわけですし、それに対して引きこもり予備軍というのがあるんですね。その数でいうと4.8%という数も出ています。引きこもりとは何なのかということに関しても、これは定義があつてないようなものですが、あえてこの調査的なところでいうと、引きこもりの定義というのは、さまざまな要因によって社会的な参加の場面が狭まり、就労や就学などの自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている状態をいう。非常にこれも漠然とした定義ですが、要するに学校にも行かず仕事もしないで、ただ自宅に長期というのがつくけれども、ある期間、社会との接点をなしに過ごしている状態を引きこもりという。それが、今若者の状況で、30代ですか、30代まで非常に多くの若者がいるので、それに対して国は何らかの対応をしなければいけないというので若者支援の具体的な法律ができて、それに対して各行政、地域行政ですね。新宿区に当たると思うんですけれども、何らかの手だてをなささいということが法的に、これは制定されている。だから、新宿にも、それがあつたということだけでなく、具体的に、この協議会等で何らかの対応策をしなければいけないということに至っている。区長も、この問題についてはかなり深刻に受けとめておられるようですので、また区長からもあるでしょうね。区の方針としてということで、もう少し継続的にこの問題は議論していければいいと思っております。

今日は非常に雑駁になりましたけれども、そういう議論もすごく大事だと思うんです。ただ、形を作って云々ということだけの議論に終わらないで、そういうことができ、僕はすごくよかったなと思っております。

それから、不登校もそうなんです。背景に不登校という経験があつた者が、引きこもりにあるというデータもあるんです。すべてではないんでしょうがね。そうすると、不登校をいかに食いとめるかということが、非常に予防になる。ところが、これも非常に難しいわけですし、いじめとか学力の問題なんです。学力の問題はまだしも、特にいじめ等々になると、教育現場はそれをひた隠しにするという、その風土がまだ一掃されていない。つい最近起こった自殺問題なども、その因果関係は絶対認めないということですよ。あれは、因果関係を証明するというのは、非常に難しいんです。でも、そこが実は問題なんです。学校現場

が、そのものに対して、ただひたすらに防衛しているということ、そこを少し取っ払えば、もう少し機関として、組織として違った対応ができる。そのあたりは非常に難しい教育行政の問題になるんですけども、新宿区だけでも、それが何か改善できれば、一つのモデルになれるような、施策ができるといいなと思っております。

3 その他

事務連絡

4 閉会

閉会挨拶

午後 3時30分閉会